

アラスカ

点と線

梅田安治



牛乳の容器

今回の調査旅行は全くの貧乏旅行で、若さ(?)だけを頼りにして、モーターで自炊というパターンが多かった。白夜の明るさにつられて遅くまで動きまわって帰ってきたときは完全グロッキー、炊事作業をしなくてもよいもの、パン・ハム・チーズ・ヨーグルトに、牛乳のがぶ飲みである。

牛乳は半ガロンのカートン入りを買っておいてよく飲んだ。そのカートンの中のひとつ、横に牛乳と全然関係のないマンガ様のものが書いてあるのがあ

Trees are  and when they grow tall, are  for  and for this carton from which you get your milk to  More trees are planted. They grow and give us Oxygen and a place for  to live. Empty cartons can be used in fun projects. 

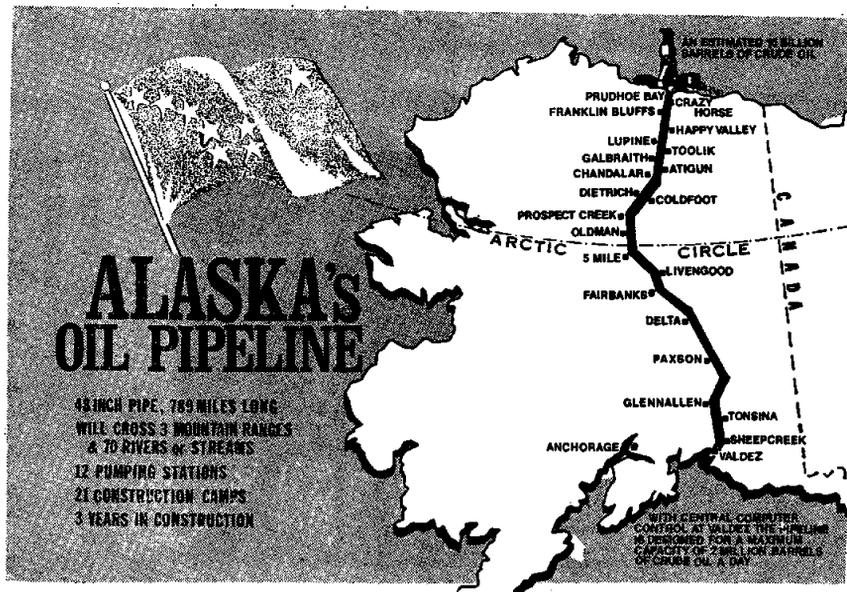
Free booklet shows you how—
Send for your copy today:
Ex-Cell-O Corporation
PR Department FWP
P.O. Box 386
Detroit, Michigan 48232

った。Tree Growth Co. 製のものである。早速、日本にいるときはマンガ本を見るために喫茶店へ通うという若い人達に解説してもらった。

「むかし、植えられた木がだんだん大きくなりま

した。そして材料として使うために切り倒されまし
た」
「そして、このカートンが作られ、君もミルクを
飲むことができたのです」
「また、木は植えられました。」

牛乳の容器



油送管路の絵はがき

「木は大きくなって、人間達に酸素を供給して
ます。森の動物達のすみかにもなっています」
「この空箱では、いろいろと面白いオモチャを作
ることが出来ます」

まさに教育とはこれだ。この教育は知識としてで
はなく、シツケとなって人間の情感の中へはいつて
行くのだ、アメリカの底辺の確固たるところを垣間
見せられた感じがした。

アラスカ自然保護協会事務局訪問

.....□

この事務局訪問は、偶然の結果であった。仲間の
一人が日本で知り合っていた女の子が、フェアバン
クス駅へ迎えにきていた。しばらくぶりの再会を
なつかしむ二人を遠くからヤッカみながら見ている
と、われわれを、彼女の宿で夕食に招待するべく
用意をしているとのこと。断ることもならず、予定

外なので皆んなのトランクをさがして、お土産物を
あつめて、迎える車に乗った。下宿の主人は三十年
前に大学を出たというメカニカル、エンジニアであ
った。ビール、ウイスキーなど飲みながら一九二五
年に建ったという、外側から見ると丸太小屋風にな
っている家の中を見まわしていると、自然保護関係

の本が多くある。主人とはアラスカにおける建築基
礎の施工法について、オイルラインのジョイントに
ついてなど、かなり専門的な話になってきた。
やがて奥さんの話す順になると、アラスカの写真
集を出して、野生動物、エスキモーなどについてレ
クチャーを聞いている感じになってきた。それはか
なり熱がこもり、格調高いものであった。「貴女は
随分と自然保護に対する造詣が深い」に対して、
「うちの主人はエンジニアでこわすことばかりやっ

ているが、私は自然保護に非常に熱心なのだ、私は
自然保護協会の事務局員で、貴方の坐っているうし
ろがオフェイスである」との返事、「私も国へ帰ると
北海道自然保護協会のメンバーである」というと、
彼女大仰に立上がり握手を求めてきた。そして、多
くのほめ言葉を並べていたようである。日本語でも
いわれたことがないようなことを英語でいわれても
理解不可能。
いづれも同じ、自然保護協会などは金がないのだ
なと思つて、事務局員の自宅のテーブルの上の事務
局を見ていると、彼女、地下室らしきところから、
立派なパンフレット類、地図などを持ってきた。
"Alaska Conservation Review" はB四判変型
で十六ページ、凸版印刷の立派なもので、年四回の
発行とのこと。
□.....□

パイプライン

.....□

アラスカのホテル代は、案内書の約二倍であつ
た。交通事故は三倍になったそうである。それもこ
れもパイプラインのせいである。

今世紀にはいつてからアラスカの各地で、石油の
試掘がされてきていた。パイプラインでは、アメリカ
海軍と石油会社が入りみだれて試掘競争をした時期
もあった。そして、一九六八年ブルドベイで地下二
五九五メートルから日産四万リットルの原油が出た
のが今日のパイプラインさわぎのはじまりである。
その後の調査で、この周辺だけで一兆六〇〇億リッ

トル以上の埋蔵が推定されている。調査が進むにつれて埋蔵量は増加している。

この輸送方法については多くの論議がなされたがブルドベイ↓ブルックス山脈↓フェアバンクス↓ア



ブルドー付近で敷設中のパイプライン

ラスカ湾バルデーズと二二四六キロメートルにわたり、直径一二五センチのパイプラインを敷設することになった。一九七四年に内務省から、その建設施工の許可が出たのである。それ以前一九七二年に内務省はパイプラインの自然環境の影響に関する報告書を出している。また、裁判所でも論じられ、議会では関連する法律の改定などがおこなわれている。

自然保護関係団体からの反対運動もあった。その後、アメリカ本土の関係団体などがこの運動に参加してきたことが、その方向を大きく変えさせたことはご存知のとおり、パイプラインは野越へ、山越え、敷設されつつある。ところでは地中に、あるところでは地上高く、□……………□

“Major Ecosystems of Alaska”

……………□

アラスカの泥炭を見に行く目的の一つに、全く処女状態の泥炭地を見たい、寒冷地での湿原の水収支状況を見たいということがあった。アラスカのことならばと、低温研究所の木下教授のところにおうかがいした。早速、大きな地図を広げて下さった。縦一・二メートル、横一・五メートルほどだ、大きなアラスカは、ツンドラ系三種、針葉樹系六種に色分けされている。針葉樹系の一つとして、Low bush, Muskeg-bogがある。話すほどに地図を裏返すと、陸地と海岸にわけたエコシステムの一覧表と、水文、地質、気象、永久凍土、地形、地文の地図と説明文が、のっている。木下先生は、地図を表にした

り裏にしたりしながら、いろいろと教えて下さった。よほどほしそうな顔をしていたとみえて「この地図、お持ちになってよいですよ、差しあげますよ」とのこと、思わず頬の筋肉のゆるんでゆくのが自分でわかるほどだった。

その夜は、しばらくふりで興奮したのを覚えている。北海道で、いや日本で、このような地図はあるだろうか、「外国人に北海道のことを説明するときこんな地図があったらどんなに素晴らしいだろう」と考えた、しかし地図がないことを嘆いているうちにはよかったが、現在、このような地図が作れるかと考えるときわめて心細い限りである。地図表現はかなり簡略化されているから、わずかのデータでもできそうであるが、簡略にするためには逆に膨大なデータが必要であり、関連部門までもの広い知識を必要とするであろう。いま、それがあたらうか、この地図“Major Ecosystems of Alaska”は Joint Federal-State Land Use Planning Commission For Alaska の作成になるものである。北海道自然保護協会編「北海道エコシステム図」がほしい。

(北海道大学農学部助教授)